



かみ さと たつ ひろ
神里達博

1967年生まれ。千葉大学大学院教授。本学客員論説委員。専門は科学史、科学技術社会論。著書に「リスクの正体」など

チャッピーと大学教育

知の「劣化」か「再定義」か

「それ、チャッピーに聞いてみれば？」 そんな学生の話に気づいたのは、1年半ぐらい前のことか。最初は、友達か教師のあだなかと思っただが調べてみると、生成AI（人工知能）「ChatGPT」（チャットGPT）の愛称だと分かった。2022年11月の衝撃的な「チャッピー登場」以来、さまざまなIT企業が独自の生成AIを公開し、現在も大変な競争状態にある。特に若い世代の利用率は高く、大学生の日常にもすでに深く入り込んでいる。

では学生は何に使っているのか。大人は業務の補助や情報収集などが主だが、若い人で目立つのが、さまざまな個人的な相談である。「気遣いの要らぬ話し相手」としてのAIの利用は、想像以上に広まっており、注目すべき社会現象である。

だがそのテーマはまた別の機会に譲る。今回は大学教員にとつてのより「切実な」問題を取り上げたい。それは、レポートなどの作成における学生の生成AIの使い方である。大学教員が集まると最近よくこの話題になる。大学教育において生成AIはどう扱われるべきなのか。

まず、日本のかなり多くの大学がガイドラインを設けている。基本的には、生成AIの使用を可能とする範囲を担当教員が判断し、その制限を越えてレポートなどの作成に使用した場合は不正と見なす、といった運用をしていることが多いようだ。

だが、生成AIの出力を学生がどの程度レポートに使ったかを、その内容から判断するのは、技術的に難しい。AIで推測する試みもあるが信頼性はあまり高くない。また作成過程での使用を全て禁止することには、多くの大学関係者も否定的だ。では、具体的にどこまでなら許されるのだろうか。

たとえば、グーグルなどの検索エンジンで文献探索に使うことは、誰もがやっていることだ。ただし、プロの研究者は出てきた文献を出発点として利用するが、もちろんうのみにするのではない。その評価をしっかりと行い、また引用された文献群をさらに深く検討することで、自分の頭の中にいわば「知のネットワーク」を形成していくのだ。これはなかなか大変な作業だが、研究の醍醐味ともいえるし、その過程でアイデアも形になっていく。

ところが生成AIを使えば、そのネットワーク構築の作業をかなり代替できてしまう。質問をすれば、関連する文献情報を網羅的に示し、場合によっては議論のストーリーも組み立ててくれる。現時点では表層的な代行に過ぎないことも多いが、将来はより精緻なものになるだろう。学生がこの機能を「学び」の最初から使うようになれば、知のマップ

ングを自分で練習する機会が失われてしまう。当面はAIをどのように使ったかを申告させ、指導していくよりないだろう。それでも、将来的にどんな影響が出るかは未知数だ。しかし、もしかするとこれも、数十年にわたって世界で推し進められてきた例の「社会改革」と関係があるのかもしれない。人間社会のあらゆる活動を市場取引の枠に落とし込もうとする、あの見慣れた「運動」のことである。

20世紀後半に始まった新自由主義の浸潤は、学校を「教育サービスを買う場所」に変容させた。今や、そのことに違和感を覚える人も少なくなってきたかもしれない。

だが教育は本来、そのような市場モデルとはなじまない。なぜなら、基本的に「消費者」は自分が何が欲しいか分かっているからこそ、市場取引に参加できるが、「学生」という立場は、自分が何が欲しいのか、最初はよく分からないからである。考えてみれば不思議なことだが、自分がどんな人間になりたいのか、なれるのか分からない段階で、学生は進路を決める。だがそうするようにならないのだ。本心に「学び」が達成されると、判断の主体が成長し変化してしまうから、教育は「消費者モデル」では捉えきれないのである。

しかし今や明らかに、学生は消費者として扱われている。スーパーで食材を買うように教育サービスを買えることが「社会正義」となった。だがこれは、知を単なる手段と見なす態度でもある。そこでは自身の成長や変貌の可能性のことが、すっばり抜け落ちているのではないか。

そして生成AIはそのような教育観とかなり相性が良いと思われる。AIは「お客様」の質問にできる限り答えようとするので、従来なら大きな知的負荷を要するような知識も、誰もが手軽に入手できるようになる。その結果、「知」そのものを「安っぽい道具」と見なす傾向が生じるかもしれない。AIの教育界への浸潤はむしろ、人間の学びや成長といった複雑なプロセスを軽視する態度を、社会にもたらすのではないか。

だがこれも半分は杞憂かもしれない。より長い時間スケールで見れば同様の現象は過去に何度も起きているからだ。活版印刷、百科事典、電卓、いずれも知的負荷の外部化を促進させたが、それによって起きたのは知の劣化というよりも「何が知であるか」の社会的な再定義である。だとすれば、長期的にはあまり心配は要らないのかもしれない。それでも短期的には課題山積だ。困難を乗り越える鍵は、「原点回帰」ではないか。大学が「正解のない問い」を引き受け、考え続けることをやめなければ、道は開ける——私はそう思う。